Eve to Eva

糸雨　冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｖｅ　ｔｏ　Ｅｖａ

【Ｎコード】
Ｎ０９７２ＢＡ

【作者名】
糸雨　冷

【あらすじ】
とある場所にある、とある遊女屋。
そこの天女と呼ばれる楼主と恋に落ち、彼の子を産み落としたイツクは、
夢の中で平行世界の先に住む自分と出会う・・・。
そこでであった呼宝という名の自分は、子供の産めない男の体を持っていて・・・。

＊サイト公開済

他人に分かるはずない。貴方以外は。

華奢な、カラダ。

いくら男と言っても彼はまだ１１歳であり、背丈だってアタシのほうが高い。

だけどその力は驚くほどに強くって、アタシは到底太刀打ちできない。

まっすぐ、背中まで伸びた髪はアタシと同じように黒く。

冷たい色合いを浮かべアタシを見下ろすその瞳は、髪と同じ漆黒の色。

幼い顔立ちをひどく冷めた雰囲気に染め上げた彼の名は、呼宝（こほう）というのだそうな。

そしてアタシ、イツクは、彼に組み敷かれている。

「えっと、あの、呼宝・・・くん？」

「なぁに？」

甘いボーイソプラノで彼は話す。

ひどく愛らしい少年の容姿をした彼は、口元に笑みを浮かべても決して目だけは笑わない。

まるで鏡を見ているように、同じ顔立ちをした彼は、もう一人のアタシ・・・なのだとか。

細く癖のない漆黒の長い髪も、大きくて丸い、黒目がちの漆黒の瞳も。

傷ひとつない滑らかで白い肌までも・・・まるで鏡を映したかのようにそっくりで。

「あの、申し訳ないんだけど、どいてくれない・・・かな？」

いくらもう一人の自分だと言われても、いくら相手が１１歳の子供だと言っても、

異性に組み敷かれたこの体制のままいるのはいささか気まずい。

相手はそんなこと思ってなさそうだが。

「なんで、どかなきゃいけないの？」

アタシと同じくらいか、もしかしたらアタシよりも高いかもしれない愛らしい声で、呼宝君は囁く。

わざわざ嫌がらせなのか、アタシの耳元に口を寄せて。

うすうす感づいていたが、どうやらアタシの予想が当たっていたらしい。

最も、彼も隠す気があったとは思えないが。

「呼宝君、アタシのこと・・・嫌い？」

その言葉に呼宝君は笑みを深くする。綺麗な綺麗な、作られた微笑み。

「アタシは、呼宝君のこと好きだよ。」

アタシがそういっても、呼宝君の丹精に作り上げられた微笑みは崩れることなく。

いったいどうしたものか、アタシが頭を悩まし始めたときに、ゆっくりと呼宝君が顔を近づけてきた。

文字通り目と鼻の先といえる距離に、自分と同じ、カオ。
だけれど彩る表情がまったく違うからか、アタシはそれを他人の顔のように眺める。

「好きなわけ、ないでしょ？
俺があんたのこと嫌いな理由だってちゃんとわかってるのに、
わざわざそんなこと聞くなんてあんがい性格悪いんだね。」

どことなく悲しそうで、皮肉げな微笑み。
理由なんて、聞かなくてもわかっている。

もしアタシが彼だとしたら、アタシもきっと、アタシが嫌いだから。
彼がアタシを嫌いな理由は、彼とアタシの決定的な差だから。

「細い、首。」

彼は笑みを崩すことなく、アタシと同じ形の唇をアタシの首筋に寄せる。
彼の華奢な肩から零れ落ちた長い黒髪が、同じように長いアタシの黒髪と、混ざる。

「膨らんだ、胸。」

いつかはアタシとは違い、骨ばった大きな男の手になるだろう手を彼は私の胸に這わせる。
その細い指はどこか丸みをおびた子供らしいもので、幼い彼の年齢を思わせる。

そして彼は、私の首筋に顔を押し付けたまま、呟いた。

「子を孕む、腹。」

並べてみたならば、きっとそっくりであるだろう。
アタシの前に現れた彼は１１歳だったけれど、もしアタシの前に現れた彼がアタシと同じ１６歳だったとしたら、
きっとアタシと彼はとてもよく似た双子の兄妹に見えただろう。

アタシは彼で、彼はアタシだから。

平行世界の先の、自分。
鏡に映った自分は、本当の自分ではなく、左右反対であるけれど、
まさに彼は、鏡の向こうのアタシだった。
容姿も色合いも何もかもが同じであるように見えて、左右が違うとでもいうように、
決定的に違うものがあった。

重ねられた紙が、１センチだけ・・・ずれていた。
さほど気にならないようなことでありながら、確実に合わさってないそれのように。

平行世界の先の私は、竜里（ろんり）の子を孕めない男という性別を持っていた。

全てを振り払い、ただ一人の手を掴め。

あのことを聞いて、数日。
いつも以上に俺はむしゃくしゃして、喧嘩に明け暮れるようになった。

町を歩けば相変わらず向けられるぶしつけな視線も、女たちが俺に向ける好意の視線も、知人が向ける哀れみによく似た心配する視線も、全てが気に入らなかった。

「また、喧嘩したの？」

長い間天姫殿の自室の、布団の上から動くことのできない俺の天女。
呆れたようにため息をついても、病魔にその身を脅かされても、相変わらず竜里は美しくて。
だけれど、今の天姫殿にそんな彼の姿はない。

ねぇ・・・何で？

いつもと同じ、天姫殿の天姫の部屋で目を覚ます。
竜里が、いなくなって・・・狂ってしまったのは俺なのか、それとも世界なのか。
いつもと違うものの配置からそれに気づき、俺は乱暴に自分の髪をかき回す。

癖のない俺の黒髪は、寝る前よりいくらか華奢な俺の手をすり抜けて落ちる。

あたりを見渡せば少しばかり困った顔をした、癖のない黒髪を持つ女が俺を見ている。
大きな丸い黒い瞳も、腰まで伸びた癖のない黒い髪も、俺が昔においてきた華奢な体と小さな背丈も。

あんたは自分と俺がどこか似ていながらも、俺のほうがあんたより綺麗だといったけれど、俺にとってのあんたはこの世で一番憎い存在だ。

「おはよう、呼宝君。」

純粋な人しかできないような、そんな優しい笑い方は俺にはできない。

「おはよう、イツク。」

竜里の愛した天姫殿を残すことさえ、俺にはできない。

小さな声で、賛美歌を歌う。竜里が好きな、賛美歌を。

「呼宝君って、声高いね。」

今日の彼は、私と同じくらい。

夢の中で彼と出会う私は、いつも１６歳の女の子で、眠る前は１６歳の息子を持つ母だ。

彼は毎夜違う姿で現われ、そしていつも変わらない人間離れした美しさを持っている。

例えば１０歳ほどの少女にも少年にも見える少年の姿であっても。
例えば１８歳の町を歩けばお姉様方に囲まれそうな青年の姿であっても。

そして今日の彼は１６歳の少年で。
でもその年頃らしからぬ色気をその身に纏っていた。

「イツクのほうが、声は高いでしょう？」
「（あぁ、それも気に入らないのか。）」

優しげにでもどことなく皮肉げに目を細めて、彼は笑う。
綺麗な綺麗なオトコノコ。だけどその美しさは花嫁のドレスとは対照的なもので。

ハデス
冥界の、女神を思い出した。

「何を考えているの？」

楽しくもないのに笑う彼は、相変わらず皮肉げな笑みを浮かべ、アタシの首に手をそえる。
絞めることはないけど、いつでも殺せるんだとでも言うように、彼はアタシの首に手をそえる。

ねぇ、貴方の竜里は、まだ・・・生きているのでしょう？

竜里が若くして死んでいくことを彼が知ったら、彼のこのアタシを

格下に見ている余裕は、崩れるのだろうか。

かわいそうな子供。竜里に愛され、竜里を愛して、アタシを殺せると信じている、可愛そうな子。

「ねぇ・・・呼宝君。ひとつ・・・教えてあげましょうか？」

彼のほうが愛されていたか、アタシのほうが愛されていたか。
結局何があっても、アタシにとっての最愛の敵は彼であり、
彼にとっての最大の敵はアタシなんだろう。

背中合わせで多くを語り合った。

俺にされるがままになっていたオンナの俺が、口を開く。
赤く色づいた唇は男を惑わし、そしてきっと、竜里の男の部分を掻き回すのだろう。

「竜里は、「死んでしまう、よ？」

彼女は大きくその目を見開き、俺は笑みを深める。
もう一人の俺である彼女の考えてることを読むのはたやすくて、だけどきっと彼女が俺の考えてることを読むことはできない。

それは彼女が、俺をオトコだと思っているから。
自分だけが女で、竜里の子供を産めるんだと俺を哀れんでいるから。

「死んだよ？あんたに会う前の日に。」

竜里のいなくなった世界で竜里に逢いたいと思って眠り、あんたに出逢った可愛そうな俺。
壊れていく天女の館と、天女を産んだお前。
同じように同じ天女に愛され、天姫殿を残すことに成功したお前と天姫殿を壊すことしかできない、俺。

「自分だけがわかってると思うなよ。」

きっと眠る前のイツクは、もっと年上のオンナのだろう。
いつも１６の姿だというけれど、眠る前だって１８でしかない俺とは違い、きっともっと大人で。

竜里が死んだことも、竜里がいない世界を生きることも慣れてしまっているのだろう。
俺とは、違い。

「竜里が、いない。
あいつ、なんていったと思う？

天姫殿を、あげるって。
竜里が育った、竜里の全てであった、竜里の誇りであった何よりも美しいこの場所を、俺に、くれるって。

そんなの・・・いらない。」

アタシが、死に際の竜里にそう言われたとしたらどうするんだろう。
どうするかなんてわからないけど、きっとアタシだって彼と同じように、

そんなの、いらない。

そう思うのだろう。

だけどそう言える筈もなく、何も言えないまま竜里を見取って、
壊れていく天姫殿を見ているしかないのだろうか。

アタシの知っている天姫殿は、今もとても華やかで。

竜里と同じ顔をしたアタシの息子がそこの天女として君臨している。
アタシは・・・竜里が生きている間、天女の妻を名乗ることはできなかったけれど、それでも先代天姫の妻となり、表の天姫殿の責任者をしている。
彼はその愛する人が愛した物を壊すことしかできないのだとしたら・・・彼はアタシが思っていたのよりも、ずっと辛い。

「また同情？もう飽きたよ。
同情って・・・知ってる？
自分のことじゃないから、自分には起こりえないことだからするんだよ？」

アタシよりもずっと大きな、骨ばった細い手が、アタシの頬に触れる。
皮肉げな笑い方も、細くて長い、華奢な骨ばった手も、話し方も語尾の響きさえも、悲しいほどに呼宝君はアタシの愛した男に似ていた。

きっと彼は、彼自身が愛した男に似ていた。

「イツクなんか・・・大嫌いだ。
だけどそれ以上に嫌いなのは、女になれなかった・・・・・・。」

綺麗な綺麗な彼が泣く。
クロの瞳から零れた涙は不自然に思えるほど澄んだ色をしていて、悪魔と呼ばれようと死神と呼ばれようと、アタシたちが他の人間となんら変わりないことを表していた。

綺麗な綺麗な、彼が泣く。
アタシよりもずっと大きな体をしたこのオトコノコは、アタシと同じように竜里に救われ、竜里を愛していたんだ。

もしも、今このときアタシは女で、このオトコノコは男だけれど、ひとつ何かが違ったら、アタシが男で、このオトコノコが女だったのだろう。

すべてはサイコロの目が1であったか2であったかの違いでしかなくて・・・・・・あぁ、もう全てが。

他愛のない違いが物事を左右し、アタシは天女の母となり、彼は天姫殿を壊した。
自分に似ているだけのオトコノコでしかなかった彼は、紛れもなくもう一人のアタシなのだ。

アタシはそのことに、泣く彼を抱きしめて初めて気づいた。

二人で死ねること。それだけがいい。

あの日泣いていた彼も、次の夜現われた時にはいつもと変わりない様子で。

アタシだけが気にして、アタシだけがあっけにとられた。
だけどアタシは女であり、竜里の子を宿したからこそ頼れる人がいたわけで、きっと彼は心を殺すことしかできないのだと思うと、彼は本当に、”可哀想”だ。

柔らかな、小さな声で彼は賛美歌を歌う。
信じてないと言い切った神を讃える歌を歌った、竜里のように。
柔らかな澄んだその歌声は、とても綺麗だ・・・。

ねぇ・・・貴方は何を想って歌うの？

白銀に近い白の簪が、涼しげな音を立てて揺れる様を、ずっと見ていた。

背の高い竜里が、高い位置で髪を纏めて、その簪を挿す。
サイドに残した僅かな髪が、竜里の動きにあわせて揺れる。
淡い、ライラックの色とも藤の色とも取れる、綺麗な薄紫。

「ほら・・・何してるの？」

綺麗に整えられた爪に彩られた男の手が、俺に差し出される。
竜里は自分の大切なものを俺に全て遺してくれたけれど、残されたくなかった。
そんなこと言ったら、君は怒る？

歌が、ヤンダ。
アタシから離れた場所、天姫の部屋を出たその前の廊下。
そこは天姫殿の中庭が見渡せる。
見晴らしのいいその場所は、欄干の外に一歩踏み出せば天姫殿の最上階であるこちらから庭に落ちてしまうというのに、彼はいくらアタシが危険だと言っても欄干に腰掛けたまま動こうとしない。

錯覚を、起こしそうなほどに彼は似ていた。

同じと言っても過言でないほどに父親にであるアタシの息子よりも遥かに。
その色合いはアタシと同じものでありながら、彼は誰よりもアタシの・・・彼の愛した男に似ていた。

黒い、髪を。
白銀に近い白の簪で、結い上げ。
何が気に入らなかったのか、乱暴にその簪を抜き取り。
黒い髪が、重たげな音を立てて彼の背に落ちる。

そのひどく美しい装飾の、涼しげな音を立てる簪は、天女のものだった。
アタシの愛した、彼の愛した男の髪で揺れていたもの。

アタシは、天姫殿を残すことに成功した。
だから竜里の・・・天姫の簪はその位と共に、アタシの息子へと譲られた。

彼は、天姫殿を残すことができなかった。
だから天姫の・・・竜里の遺品は、全て彼へと譲渡された。
代々伝わる、天女の簪さえも。

初めて、逢った日のことを・・・今でも、覚えていますか？

雪の降る、寒い日で。
薄紫の髪にうっすらと白銀の雪がかかってた。

「子供が夜に、なんでこんなとこにいるの？」

竜里だって、子供だったくせに。
５つ違えど、竜里だって子供だったくせに。
いつだって俺を子ども扱いして、いつだって・・・・・・。

「呼宝君？」

オンナの、声。
俺が無くした、高く澄んだ声。
視線を向けると、心配そうに俺を見る、あのオンナ。

「そんなところに座ったまま寝たら、おちたらどうするの？」

心配そうにそういう様は、まるで母親。
ユメ、なんだから、死ぬわけないのに。
それでも・・・。

「死ねたら、よかったのに。
竜里と一緒に、死んでしまえたならよかったのに。」

二人で死んでしまえたなら、きっと壊れゆく天姫殿を見ているより、
幸せ。

さあもう一度身体を重ねて、確認しよう。

思わず、息を呑んだ。
彼がまさかそんなことを思っていたなんて・・・とか、そんなことを思ったわけじゃない。
彼が死にたいと思っていたのは、気づいていた。
”アタシ”が嫌いで、女になれなかった”自分”も嫌い。
泣きながら彼がそう呟いた日に、アタシは彼が死にたくても死ねないことに気づいていた。
だけど彼が、弱音としか言えないようなことを口に出すとは、思ってもいなかったんだ。

「何？そんなにおかしい？」

今にも泣き出しそうな、だけど皮肉げな表情で、彼は笑う。
もう一人の、アタシ。

「泣きたいなら、泣けばいいのに。」

アタシのそんな言葉に、彼は目を丸くする。
綺麗で可愛い、孤独な子供。

「泣き方なんて、もう忘れたんだよ。」

泣きそうな顔でそう言う君に、アタシは最期まで死ぬことを怖いと言わなかった竜里を思い出した。
だから・・・だろうか。

「何がしたいの？」

彼を、抱きしめて。
アタシの腕の中で、彼はまた皮肉げに笑う。
幼い彼はアタシが思っていたよりも、ずっと少年だった。

「優しくしたって・・・絆されたりしないよ？」

そう言って笑う彼を、アタシはより強く抱きしめた。

差し込む光を煩わしく思いながらも、アタシは目を開ける。

今日も今日とて、アタシは１６の息子をもつ母であり、表の天姫殿の責任者を務める女である。
間違っても綺麗で美しい、１８の泣けない少年ではなかった。

部屋の襖を開けると、そこに広がっているのは煌びやかで荘厳な、麗しの館。
嘘にまみれ、それでも少しも美しさを損なわれることの無い、天女の楽園。
昨晩から降り続いていた雪は、この場所を白銀の世界へと染め上げる。

「なんで・・・。」

同じ人でありながら、性別が違っていた、それだけ。
大きな違いだという人もいるだろうが、それでもきっと、彼とアタシがした選択は何一つ違わないのだろう。

彼とアタシ、背中合わせ。
それなのにアタシよりもずっと大きな彼の手には何も残らず、彼よりもずっと小さなアタシの手にはたくさんのものが残った。

差し込む光に目を細めて、俺は体を起こす。
違和感を感じて頬に触れると、そこには涙のあとが。

昨日までと同じように、俺の隣に眠る人は、もういない。
緩慢な動作で体を起こせば、夢の中よりもずっと長い髪が、俺の背を流れる。

どこに・・・いきたい？

ユメの中で重ねた、俺とオンナの俺の身体。
確かにあれは、平行世界の先の俺の、俺自身の身体であったはずなのに、俺とあいつの身体はまったく違ったものだった。

あれを持っていたら、俺もこの場所を残すことができた、だなんて。

無性に泣きたくて、仕方がなかった。
だけど今更、泣くことなんてできなくって。

最愛の母が生きていた頃は、他の子供と同じように泣いていたのに。

母が死んでからは、めっきり泣けなくなった。
母が死んで、泣いたのは一度きり。

この死んでいく天女の館をあげると、竜里が言ったときだけ。

天姫殿最期の天女の名は、今宵野竜里と言った。
どの女にも、妓にも勝る、完璧な美貌と最上級の気品と才覚を兼ね備えた、長い天姫殿の歴史の中で、一番と謳われた天女だった。
だけど彼はたった一つだけ間違いを犯し、子をなすことのできない者・・・男を、愛した。

壊れていく天姫殿の中で、俺はこの麗しの館が一番美しく見える場所を与えられた。

本日も、晴天なり。
自分の唇に手を当てると、俺はいつの日だったか天女とした口づけの感触を覚えている気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0972ba/

Eve to Eva

2012年1月2日04時51分発行